

Title	農村部の考古学的調査と地域史：藤沢市慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の事例から
Sub Title	Archaeology as regional history : the Keio SFC site in Kanagawa Prefecture
Author	桜井, 準也(Sakurai, Junya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.4 (1997. 7) ,p.55(531)- 80(556)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970700-0055">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970700-0055</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 農村部の考古学的調査と地域史

—藤沢市慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の事例から—

桜井準也

## I はじめに

近年、盛んとなつてゐる近世考古学は、遺構論や遺物論だけでなく文献史学や民俗学などの関連分野との連携により様々な成果をあげてゐる。その中で江戸・大阪・堺などの都市部の調査・研究が主体であつた近世考古学は八王子市宇津木台遺跡群（宇津木台地区遺跡調査会一九八八a・b）などの調査を契機として農村部の考古学的調査も徐々に行われるようになつてきてゐる。縄文

時代や古代など他の時代との複合遺跡がほとんどである農村部の調査において、近世の調査に重点を置くことは難しいが、出土遺物などから遺構の年代が決定されれば、居住地や耕地利用の変遷過程を把握することができ、当時の村落景観を復原することも可能となる。今後は考古

学的調査が近世村落史研究や地域史に果たす役割が大きくなると予想されるが、そのためには、綿密な考古学的調査を行うだけでなく、発掘調査と並行して周辺地域の歴史、民俗、自然環境などの関連調査を行い、地域史の中で遺跡を捉えるという努力が必要となつてくる。このような過程を経ることにより、限られた調査対象区域の考古学的調査ではなく、地域に還元できる調査成果をあげることができるわけである。

本稿では、神奈川県藤沢市に所在する慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡（以下で慶應SFC遺跡と略称する）の調査事例を用い、農村部の考古学的調査が地域の中でのように位置づけられ、地域史に貢献できるかについて検討してみたい。

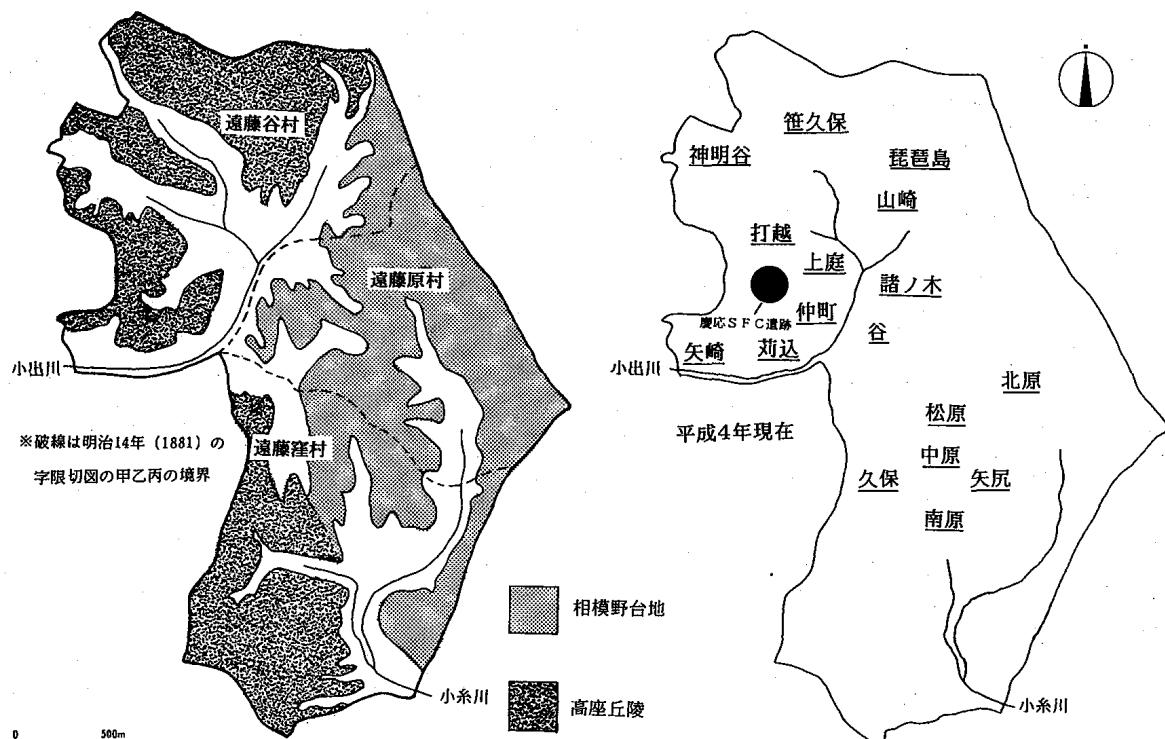
## II 慶應SFC遺跡の概要

慶應SFC遺跡は神奈川県中央部に位置する藤沢市の北西部遠藤地区に所在し、地形的には小出川右岸の高座丘陵上に位置する（第1図）。発掘調査は慶應義塾大学の新学部設置に伴う事前調査で、本調査は一九八八年から一九九〇年にかけて行われ、既に発掘調査報告書が刊行されている（慶應義塾一九九一a・b、一九九三a・b）。本調査は約十三万<sup>2</sup>m<sup>2</sup>の広範囲に及び、その結果、岩宿（旧石器）時代の遺物はI～V区すべての調査区から出土し、六枚の文化層が確認された。なかでもII区で検出された第V文化層は資料の少ない立川口一ム層第二黒色帶中のまとまつた資料として注目されている。

繩文時代では、隆線文土器を伴う草創期の遺物が各調査区から出土し、十三ヶ所の遺物集中部や住居状遺構などが検出された。また、早期では竪穴住居址一軒、炉穴五〇基、中期では十一軒の竪穴住居址、陥穴状土坑五十二基や集石遺構三十六基などが検出された。弥生時代後期古墳時代前期ではII区で浅い環壕に囲まれた集落が検出され、九十軒の竪穴住居址、三棟の掘立柱建物址、二基の方形周溝墓、七基の土坑、二基の井戸跡が検出され

た。この時期以降、遺構・遺物とも検出数が減り、古墳時代後期では二軒の竪穴住居址、一棟の掘立柱建物址が検出され、奈良・平安時代では竪穴住居址は存在せず、火葬墓が検出されたのみである。中世以降本遺跡は耕地あるいは水田として利用されるようになり、調査区全域から多数の溝状遺構や道状遺構、土壙墓、塚、井戸、室状遺構、敷石遺構などが検出された。また、近代に関しては溝状遺構やイモ穴、炭焼遺構などとともに防空壕の調査も行っている。

このように、短期間の調査ではあつたが本遺跡の調査は広範囲にわたる調査であつたため、従来の考古学的調査だけでなく地形や植生など過去の環境復原を積極的に行うとともに、遺跡周辺の地域との関連も重視し、周辺地域の歴史や民俗に関する調査も実施した（山口一九九三、浅野一九九三）。また、開発行為に先だって『環境影響予測評価書』（慶應義塾一九八八）が作成され、その中では気象・水象・地象をはじめ動植物の生態系調査などの調査項目が設けられ、開発時点での様々な自然環境についての調査結果が報告とともに、新学部開校による景観や社会的影響なども報告されており、周辺環境に関する貴重な情報を提供している。



第1図 遠藤の地形と集落分布

### III 遺跡周辺の諸環境

#### 1. 遠藤の概要

慶應SFC遺跡は藤沢市遠藤<sup>(1)</sup>に所在するが、昭和三〇年代の遠藤について、『遠藤民俗聞書き』（丸山他一九六一）の序文の中で柳田國男は次のように述べている。

遠藤という村はよくよく「歴史」とは因縁のない、無名の地であったという感じを深くする。のみならず、神奈川県の中でも東京の中心からわずか一三時間の行程の区域に、戦後十数年たつた今日、まだこんなところがあろうとは考えていなかつたことであつた。新編相模風土記以後も、この付近には記録らしい記録もなく、都会に近いために放つておかれた期間が長かつたのであろう。

遠藤は柳田が述べているような歴史とまつたく縁のない村といふわけではないが、慶應SFC遺跡が岩宿（旧石器）時代～弥生時代の遺跡を主体とすることからわかるように、遠藤には古代に大きな集落が営まれた痕跡はない。中世になつても豪族や武士の本拠地ではなく、

多くが戦国期から近世にかけて開発された土地である。

近世になつても大山街道や厚木街道などの主要な街道が中心部を通ることはなく、生業の面でも地形的制約から水田よりも畑の比率の高いという農村地帯であった。近代以降は高座芋の栽培、高座豚の飼育、養蚕などが盛んな時期もあつたが、基本的には農村景観を大きく変えるような開発もなく、人口も近世末期から近代にかけて微増はしているものの、急激な増加はみられなかつた。その後、昭和三〇年代になると藤沢市が藤沢北部地区に工場の誘致を行なつたことなどから遠藤の人口や世帯数が急激に増加している。さらに、昭和四六年（一九七一）になると南部地区に新興住宅地（湘南ライフタウン）が建設され、人口増加に拍車をかけている。

## 2. 遠藤の地形と気候

### (1) 地形

遠藤は東西約二・八km、南北約四kmの範囲を占める。地形的には中央部北西側に茅ヶ崎市内で相模川と合流する小出川が南北方向に流れ、南東部では引地川と合流する小糸川が南東方向へ流れている。地形区分では北西側が小出川とその支流により開析され、入り組んだ地形を

呈する高座丘陵（下末吉面）、東側は相模野台地（相模原面）にあたる（第1図）。標高は南東部の台地平坦部で約30m、北西部および南部の丘陵頂部で約35~45mである。明和四年（一七六七）に成立した三給支配により遠藤村は遠藤谷村、遠藤窪村、遠藤原村に区分されたが、これらの村の区分は地形区分とほぼ一致しており、遠藤谷村は高座丘陵、遠藤原村は相模野台地、遠藤窪村は高座丘陵と相模野台地の境界付近に発達する窪地状の地形にあたる。また、慶應SFC遺跡周辺は地下水の水位が高く、発掘調査に支障をきたすことが多かつた。地下水には降雨から補給される自由地下水と下末吉層（細砂・砂礫）の被圧面地下水が存在するが、当該地域では自由地下水の深さは地表面から二~四m程度、被圧地下水の深さは二〇~三〇m程度である。

### (2) 気候

『環境影響予測評価書』によると、神奈川県の気候は東部の東京湾型気候区、西部の山岳型気候区、中央部北側の内陸型気候区、中央部南側の湘南型気候区の四つの気象区に区分できるが、慶應SFC遺跡周辺は内陸型気候区に区分される。年平均気温は一四・七度で最暖月は八月で平均二五・九度、最寒月は二月で平均三・九度で

ある。風向きは夏は南向きであるが他の季節は北寄りの風が卓越しており、主風向は北寄りである。平均風速は二・一・三・一 m／秒であり、冬・春が大きい。最大瞬間風速は五・六・九・九 m／秒であり、冬がやや大きい。また、年間降水量は一六七二 mm（気象庁海老名観測所）である。

### 3. 遠藤の歴史

#### (1) 遠藤の沿革

遠藤という地名については、明治一二年（一八七九）の『皇国地誌』に「往昔ヨリ本郡ニ屬ス起源詳ならず口碑ニ治承年間遠藤武者盛遠ノ采地なりしを以て村名とし後大庭庄遠藤村ト号す」とある。治承年間（一一七七）一二八二）の遠藤武者盛遠については、北原集落の内田氏屋敷内に塚と盛遠の墓とされる石塔が存在するものの、伝承の域を出るものではなく、真偽は定かではない。また、このころの遠藤は文治年間（一一八五～一九〇〇）に大庭景能の采地となつており、大庭景政が伊勢神宮に寄進した「大庭御厨」に含まれていたとされている。しかし、これに対し服部清道は遠藤が現在の綾瀬市から藤沢市北部にかけての渋谷庄の一部ではなかつたかとして

いる（服部 一九五九）。その後、遠藤は応仁年間（一四八七～一四六九）に上杉定正の采地となり、永正年間（一五〇四～一五二二）に後北条家臣仙波氏の采地となつていて、遠藤に所在する宝泉寺は亨禄三年（一五三〇）入寂の如幻宗悟が開山し、開基は仙波土佐守とされている。天保一二年（一八四一）頃の『新編相模國風土記稿』によると、布施三河守の子次種は氏政に仕え、仙波氏の養子となって文禄四年（一五九五）に六十六歳で亡くなっていることから土佐守は布施三河守と同一人物で後に土佐守と改めたと推定されている。『寛政重修諸家譜』によると次種が遠藤に住んでいたこと、次種の子吉種は弥七郎であることが記載されている。また、永禄二年（一五六九）の『北条氏所領役帳』に御馬廻衆として打戻の仙波弥七郎吉種の名がみえる。ここで、当時仙波氏が支配していたにもかかわらず『北条氏所領役帳』に遠藤が登場してこない理由として、湯山学は宝泉寺関連の文書（山口 一九七三）に「大日本国相模州大庭庄打撒郷遠藤村」という記載があることを引用して遠藤がかつて打戻郷に属してした可能性が高いと述べている（湯山 一九七〇）。

氏の采地（四百石）となり、翌一九年（一五九二）には遠藤村のうち遠藤原村（百八十一石）が駒井氏の采地、明和四年（一七六七）に遠藤谷村（二百十八石）が杉浦氏の采地となり、旧来の遠藤窪村（百七十八石）も加えて三つの村が成立した（三給支配）。この区分は明治四年（一八八二）の村限図で甲乙丙に色分けされている地域に対応する。なお、遠藤窪村は延宝七年（一六七九）、遠藤原村は承応三年（一六五四）に検地が行われている。近代以降は、明治三年（一八七〇）に三村が合併して神奈川県高座郡遠藤村となり、明治二二年（一八八九）に近隣五ヶ村が合併して小出村となつた後、昭和三〇年（一九五五）藤沢市に編入された。昭和三六年（一九六二）に東部地区<sup>(2)</sup>にいすゞ自動車藤沢工場やプレス工業の操業が開始され、昭和四六年（一九七一）には南部地区に新興住宅地（湘南ライフタウン）の開発が開始された。

## （2）遠藤の開発

遠藤の開発について『皇国地誌』では「……其頃（治承年間—筆者註）人家ハ十八戸たりしか其後漸加して慶長年間本村の東北曠野を割別一村を置き遠藤原村とし宝暦年間又北部之地を分割して遠藤谷村とす遠藤窪村遠藤

原村遠藤谷村の三村たりしが明治三年旧ニ復し合併して遠藤村と号し冠称を廢して單に村名を用ゆ……」とあり、遠藤村は近世以前は遠藤窪村付近が中心であつたが、慶長年間（一五九六—一六一四）に遠藤原村、宝暦年間（一七五一—一七六三）に遠藤谷村が分割されており、この順に開発が行われたことがわかる。

遠藤の集落は、天保年間の『新編相模國風土記稿』によると集落（小名）として西谷（西ノ谷）、諸木（諸ノ木）、琵琶島、久保（窪）、笛久保、打越、苅込、矢崎、北原、松原、南原、矢尻の十二集落があげられ、明治初期の『皇国地誌』では久保、南原、松原、北原、諸ノ木、琵琶島、笛久保、神明谷、打越、苅込、矢崎の十一集落とその戸数が記載されている。また、遠藤全体の戸数については、天保二二年頃（一八四二）百六十戸（『新編相模國風土記稿』）、明治一二年（一八七九）百七十八戸（『皇国地誌』）、明治二四年（一八九二）百八十三戸（『日本地名大辞典』）、大正二二年（一九二三）二百二十戸（『関東大震災被害記録』）と記載されている。戦後では昭和三〇年（一九五五）三百一十三戸、昭和四〇年（一九六五）五百三十二戸、昭和五〇年（一九七五）一千四百八十五戸、昭和六〇年（一九八五）四千三

百六十七世帯（いすれも国勢調査の結果）となつてゐる。

このように、遠藤の戸数は近世末期～明治期には百六十～一百戸であつたものが、大正から昭和三〇年代にかけて徐々に増加し、昭和四〇年以降急激に増加してゐるが、これは昭和三〇年代後半以降の高度経済成長期の工場誘致や新興住宅地（湘南ライフタウン）の開発の影響によると思われる。

#### 4. 遠藤の民俗

##### (1) 民俗調査

遠藤では昭和三〇年以降の戸数や人口の増加にも関わらず西部地区を中心に、近世以来の農村景観を比較的保持している。柳田も述べているように文献史料が少ないという制約はあるものの、地元の青木義春氏の協力などもあり、遠藤は藤沢市内で民俗調査の盛んな地域として評価されている。遠藤における民俗調査は、昭和三〇年（一九五五）以降幾度か行われてゐる。まず、柳田の門下生である丸山久子らによる総合調査（丸山他一九六二）が行われ『遠藤民俗聞書』としてまとめられた。続いて荻野好子らによる総合調査（荻野他一九八〇）が行われ、『遠藤の昔の生活』としてまとめられている。

##### (2) 社会組織

遠藤の主な社会組織としては、自發的な組織であるジミョウやコウジュウ、行政的組織の色合いが強いクミアイがある。ジミョウはジワケやジルイとも呼ばれ、何代か判らないほど昔に一つの土地をわけあつた間柄で土地がある限り切つても切れない関係とされてゐる（荻野他一九八〇）。原則として同姓であり、血縁関係があることが基本として認識されているが、本分家関係が不明確である場合も稀ではない。ジミョウ内での相互扶助関係は農作業の協力や冠婚葬祭など重要な役割を果たす。葬式や結婚式では当事者の家族に代わり上座に座り采配をふるう。ジミョウは一般的に三～四軒で構成され、戦後は土地を分けてシンヤ（分家）に出ることが多かつた

ため、現在では七～八軒で構成されることが少なくないという（浅野一九九三）。コウジュウ（講中）はコウチュウやコウジュとも呼ばれ、昔から土地の住人が決めた付き合いの範囲で、十二～十六戸程で構成される（丸山他一九六一）。地縁に基づく組織で原則として複数の姓からなる。道普請や冠婚葬祭の手伝いなどで相互扶助の役割を果たす。クミアイはクミやチヨウナイとも呼ばれ、もともとは四、五軒であつたが、分家や移転で現在では四軒から十数軒で構成される。相互扶助的な機能を持つており、地縁的な近隣集団である。ジミョウよりは薄い関係で、冠婚葬祭の場合はジミョウの次に軽い仕事（例えば墓掘り）を受け持つ。近世の五人組や明治初年の伍長組につながる組織とされている（丸山他一九六一、荻野他一九八〇）。

### (3) 信仰

遠藤の社としては鎮守である御嶽神社がある。祭神は日本武尊で、創建年代は不明であるが、慶長五年（一六〇〇）岡部某が祈願して女兒を得たので神田を奉納し、大阪冬の陣（一六一四）に再び靈験を得たため元和年間（一六一五～一六二三年）に江戸で社殿を造り運んだとされている。明治初年まで別当として修驗寺の大驗寺が

神社の下に存在していた。現在は各集落から十二名の宮世話人が選ばれ運営している。さらに各集落ごとに稻荷神社、白山神社、妙見神社、日吉神社、弁天神社などの小社がある。遠藤の寺院として現存するのは宝泉寺のみである。宝泉寺は曹洞宗で永正年間（一五〇八～一五二〇）に如幻宗悟が開山したと伝えられている。開基は後北条家臣仙波土佐守である。本尊は釈迦像で天文三年（一五三四）造立とされている。天正一八年（一五九〇）に寺領として御朱印地二十一石を拝領している。寺は関東大震災で倒壊したため、本来の位置より東側に移動している。また、現存しないがかつて慶應SFC遺跡の東側隣接地に玄光院という宝泉寺の末寺が存在した。玄光院は宝泉寺八世楊岩の創立としている。楊岩は寛文五年（一六六五）卒とされているので創立年代は一七世紀前半と考えられ、廃寺となつたのは明治維新の頃である。近年公民館の建設に伴い、本寺院跡から一七世紀後半から一九世紀初頭にかけての墓石が多数出土し、服部清道によつて報告がなされている（服部一九九三）。遠藤の講としては道祖神講・地神講・庚申講・念佛講などがあり、道祖神講は集落単位でサイトヤキを行つてゐる。地神講や庚申講は宿が持ち回りでオヒマチをする。遠隔地

講としては大山講や伊勢講が行わっていた。また、慶応SFC遺跡周辺では仲町集落付近に明治・大正期にかけて富士講の一派である丸山教の教会があつたとされ、墓域調査で丸山教の墓石を確認している。

#### (4) 生業

『皇国地誌』によると、遠藤は地味が「其色黒く壟土

居多細砂少く雜ハる其質中の下竿麦蕃薯大根及ヒ桑茶ニ

宜しく稻梁ニ可なり水利便ならず旱魃を恐る」とあり、

農地の条件は決して良くはなかつたことがわかる。また、

小出川流域は沖積地が少なく、全体のほぼ半分が丘陵地で占められているため、畑の面積が二百七十六町に対し田の面積が四十五町となつており、大正期の農業は甘藷・麦・粟・養蚕などが中心であつた。水田についても谷戸田が多く、湧水を直接引くため水温が低く、収穫量はかなり少なかつた。そのため、米は自家用がほとんどで換金できる家は少なかつた。畑作は明治三一年（一八九八）頃までは稗・粟・里芋・菜種・大豆が主で、それ以降は大麦・小麦・粟・陸稻・芋などが主要な作物であった。戦後になると甘藷・トマト・スイカなどの換金作物も作られるようになつた。その他の生業としては、明治末から昭和初期には養蚕が盛んで養蚕組合があり、

中原には養蚕神社が現存する。タバコも明治四〇年（一九〇七）頃より作られ、昭和二三年（一九四八）頃が最も盛んであった。また、遠藤は旧高座郡にあたり高座豚の産地であつたため、どの家でも豚を一、二頭は飼つていたという（荻野他一九八〇）。

### III 遺跡調査と地域史

#### 1. 中世の村境について

文献から遠藤の歴史を遡ると一六世紀初頭とされる仙波氏の采地となり、宝泉寺が開山した時期が重要な位置を占める。しかし、当時の支配者である仙波氏は隣りの打戻も支配しており、その境は明確ではない。また、既に述べたように、仙波氏の采地であつた遠藤が永禄二年（一五五九）の『北条氏所領役帳』に登場してこないた（湯山一九七〇）。その後、天正一八年（一五九〇）には旗本岡部氏の采地となり（四百石）、翌一九年（一五九一）に遠藤原村（百八十一石）が駒井氏の采地となつており、検地は承応三年（一六五四）に遠藤原村、延宝七年（一六七九）に遠藤窪村で行われている。その頃に

村切りが行われ、現在に至る遠藤の範囲が確定したと考えられるが、それ以前の遠藤と打戻の村境が現在と異なり、東側にあつた可能性が高い。その理由は次のようにまとめられる。

①遠藤西部地区の小出川の西側、つまり慶應SFC遺跡を含む矢崎・苅込・神明谷付近がかつて打戻に属していたという伝承がある（丸山他一九六一、荻野他一九八〇）。

②打戻の鎮守で式内社である宇都母知神社の位置が遠藤との境に接しており不自然である。

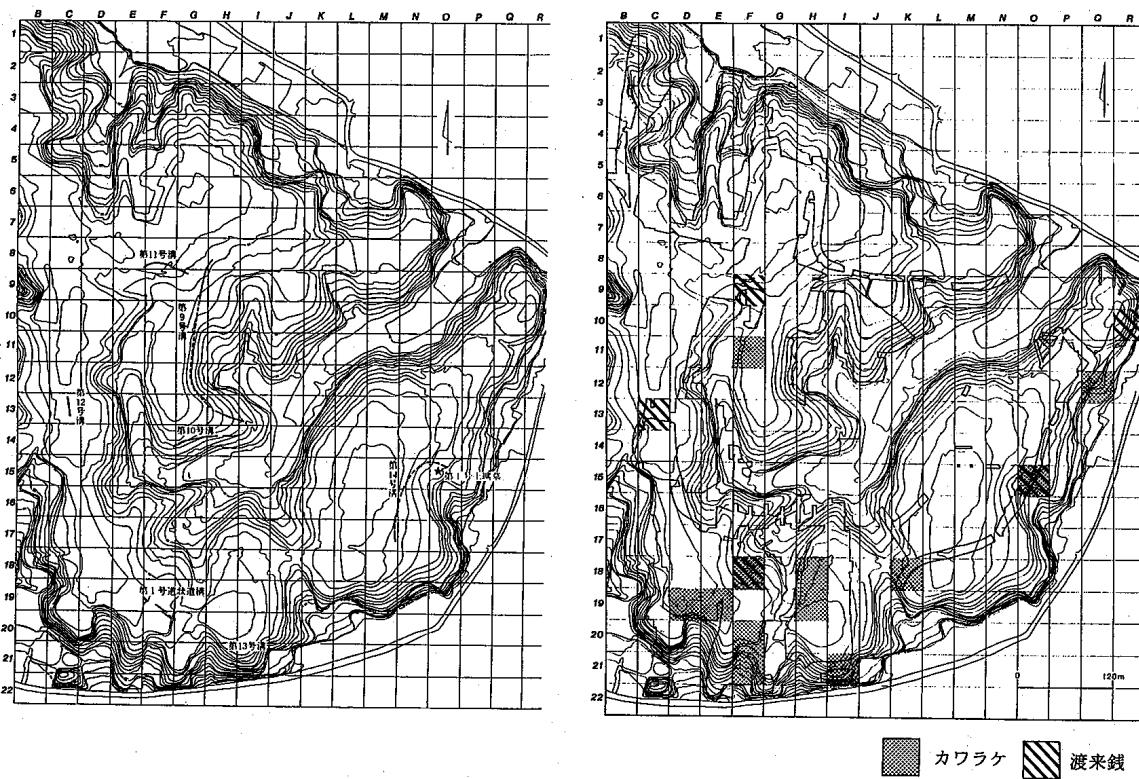
③遠藤と打戻の境界の両側に同じ名称の小字（矢崎・中尾）が存在する。

④宇都母知神社北側に隣接する集落は打戻の神明谷集落と遠藤の神明谷集落に区切られているが、住人はいずれも長田姓であり、両者がかつて一つの集落であった可能性が高い。

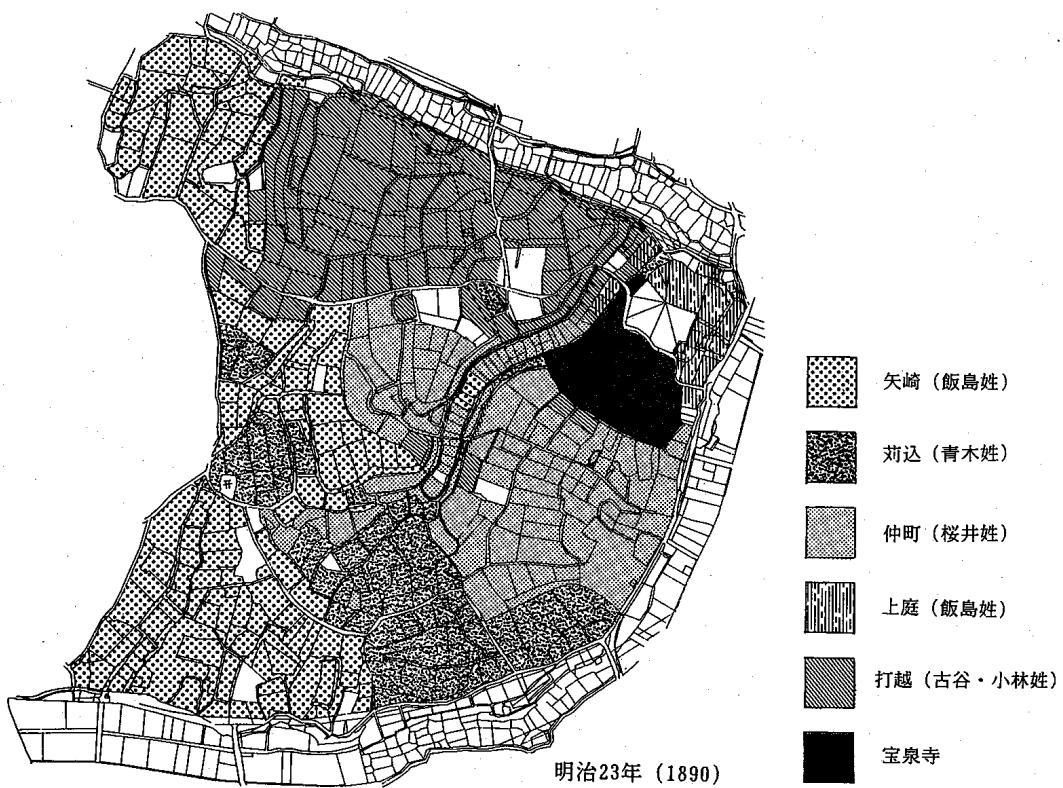
当時の村境については村絵図の検討が有効な手段となるが、遠藤には中世ないし近世の村絵図はまったく残っていない。これに対し、打戻には近世の村絵図は残つてゐるが、文政一年（一八二八）のもので遠藤との境は現在の境と同じ位置にある。このように、遠藤と打戻の

村境の変化を示す直接的な証拠はなく、すべて状況証拠に依拠している。

そこでこの問題について、当時の村境付近にあたるとされている慶應SFC遺跡の発掘調査の成果を用いて検討してみたい。慶應SFC遺跡では中世の遺物や遺構はそれほど多くはなく、中世として報告されている遺構や遺物はほとんどが中世末～近世初頭（一六世紀～一七世紀はじめ）であり、仙波氏あるいは岡部氏により支配された時期にあたる。検出された遺構の種類は溝状遺構、道状遺構、土壙墓などであるが、中世の溝状遺構と近世の溝状遺構ではその区画や方向が異なることが確認されており、中世末～近世初頭に遺跡内の土地利用形態に何らかの変化があつたと考えられる。その中で遠藤と打戻との村境の問題との関連から注目されるのは、調査区のほぼ中央部の丘陵上に分布する溝状遺構群の存在である。これらの溝状遺構群はG・H列を南北に走る第9号溝を中心いて、8列を東西に走る第11号溝、14列を東西に走る第10号溝で構成され、いずれも断面がV字状を呈している。これらは丘陵の稜線に沿つて構築されていることや傾斜角から流水溝ではなく、区画溝<sup>(4)</sup>と考えられる（第2図左）。このうち、特に注目される溝状遺構は遺跡中央



第2図 慶應SFC遺跡の中世～近世初頭の遺構・遺物分布



第3図 慶應SFC遺跡の明治期の土地所有

部の丘陵上を陵線に沿つて南東方向から北方向に屈曲しながら延びる第9号溝である。調査の結果、この溝状遺構はさらに北側に延び、長さは三百m以上になると推定されるため、この溝状遺構が遠藤と打戻の村境を表象していた可能性がある。また、この時期には他にも注目される遺構が存在する。13Cグリッドの第12号溝、19-20・E-Fグリッドに残存していた第1号道状遺構、21-H-Iグリッドの第13号溝は一連の遺構であり、遠藤の宝泉寺と打戻の宇都母知神社を結ぶ道路であつたと思われる。さらに15-17-M-Oグリッドを弧状に区画する第14号溝が存在し、この区画内に渡来銭の副葬された第1号土壙墓が検出されている。この付近は「元屋敷」呼ばれており、仙波氏の屋敷地であつた可能性もある。

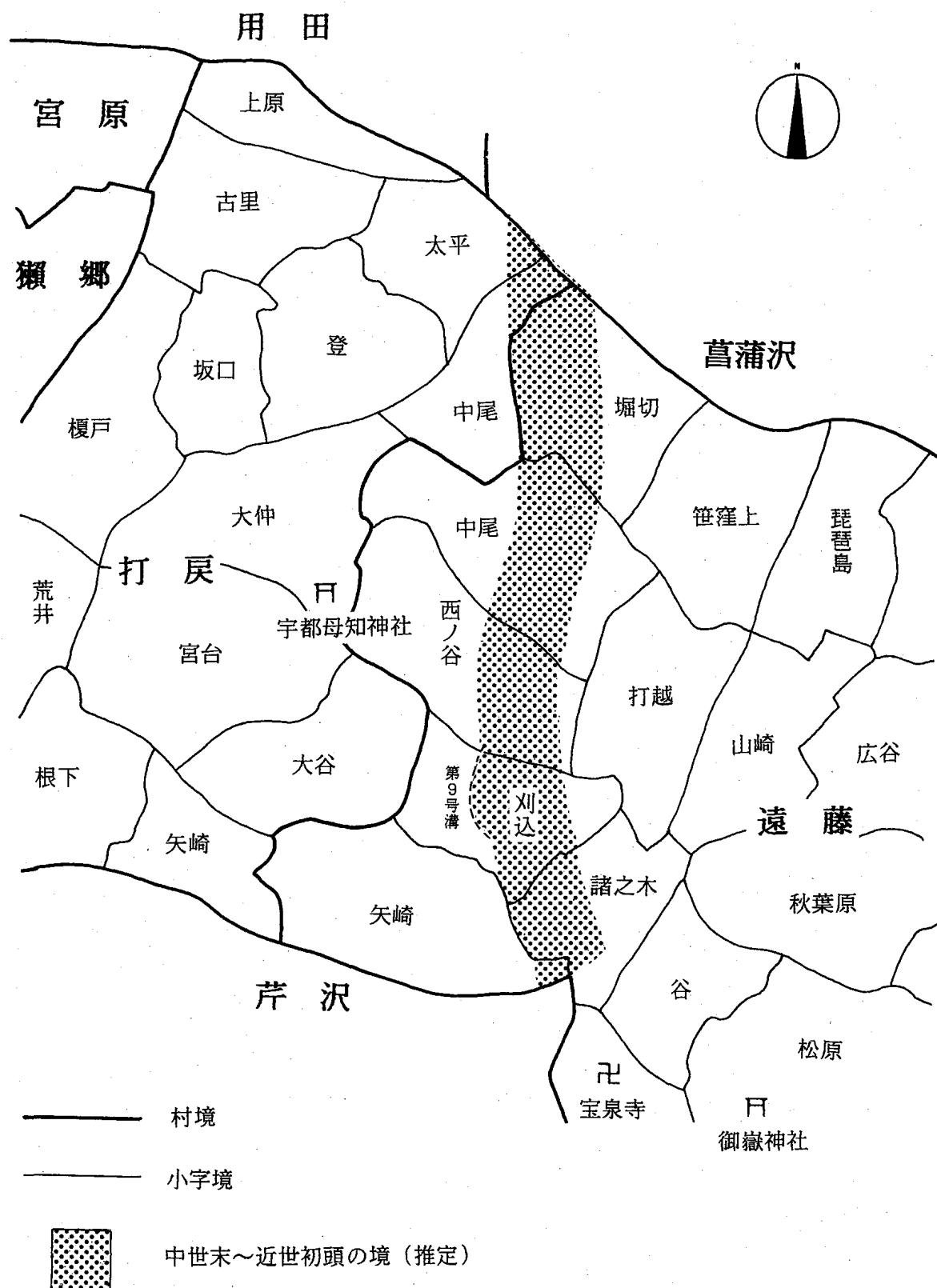
次に、中世末-近世初頭に属すると思われる出土遺物のうちカワラケと渡来銭<sup>(5)</sup>の分布を検討すると、両者は同じ時期の遺構の周辺で出土しており、谷戸内では出土していないことがわかる（第2図右）。このことは本遺跡ではこの時期には谷戸内は未開発であり、丘陵平坦部についても遺跡全域にわたる開発は行われておらず、遺跡南部を中心を開発されたことが窺える。また、当時の村境

と関連すると思われる第9号溝の周辺および東側の地域は谷戸部を中心に未開発地域であつたと推定される。

最後に、遺跡の土地所有関係について検討してみたい。

ここでは明治二三年（一八九〇）の土地所有者を調査し、集落ごとにまとめてみた（第3図）。その結果、所有面積は様々であるが矢崎・苅込・仲町・上庭・打越の各集落民の所有地は基本的に各集落の背後の丘陵部の土地を所有していることがわかる。ただし、ここで注目されるのは矢崎集落の住民の所有地が、他集落とは異なり遺跡の西側を丘陵を縦断する形で広く分布している点である。これらの遺跡内の土地所有状況と検出された遺構群の分布を検討すると、問題となつている第9号溝が矢崎集落の住民の土地の東側境界と一致している。この土地所有状況と矢崎がかつて打戻に属していたという伝承も考慮すると、第9号溝が遠藤と打戻の境界をあらわしている可能性が高い。

このように、中世末（一六世紀）には打戻・遠藤とも仙波氏が治めており、当初耕地開発も遅れていたため両者の境は不明瞭であったが、この地域の開発が徐々に進むに従つて、境が意識されるようになり、区画溝が掘られたと考えられる。また、現在遠藤に属している中尾・



第4図 遠藤と打戻の村境

西ノ谷・苅込・矢崎は、この頃には打戻に属していたと思われ、本遺跡の第9号溝がその境を表象していた可能性が高い（第4図）。この問題は今後、新たな文献や絵図の発見により今後解決される可能性もあるが、この検討結果は発掘調査の成果が中世の村境の解明の手がかりとなるという点で重要な意味を持つと思われる。

## 2. 慶応SFC遺跡と遠藤の開発

### (1) 遺構分布からみた慶応SFC遺跡内の開発過程

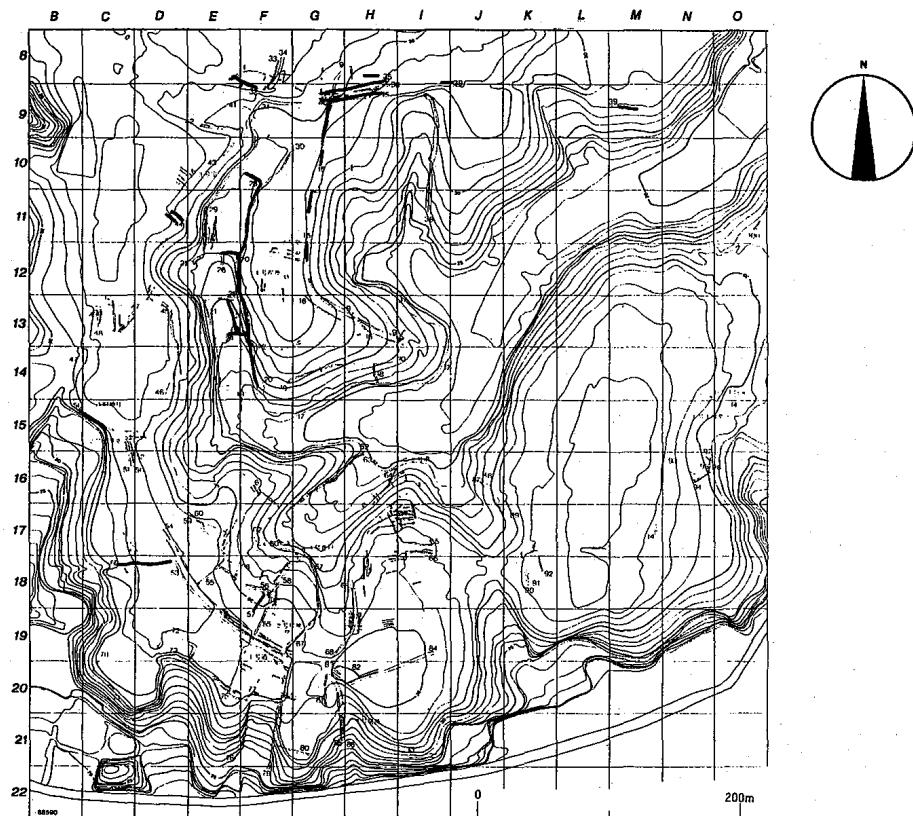
慶応SFC遺跡では、近世以降の遺構として多数の溝状遺構<sup>(6)</sup>や土壙墓、塚、井戸、室状遺構などが検出され、当時の耕地景観を復元することができた。ここでは主に覆土から溝状遺構の構築年代を推定し、その分布状況を時期別に検討することにより、近世における遺跡内の開発過程の復元を試みてみたい。

本遺跡の中・近世の溝状遺構は時期的に①中世の溝状遺構（中世末～近世初頭）、②宝永スコリア（一七〇七年下降）の一次堆積層を含む近世の溝状遺構（近世前期）、③宝永スコリアの二次堆積層（Ia層）を含む近世の溝状遺構（近世中期以降）に区分できる。このうち、中世の溝状遺構は丘陵の稜線に沿って構築されており、

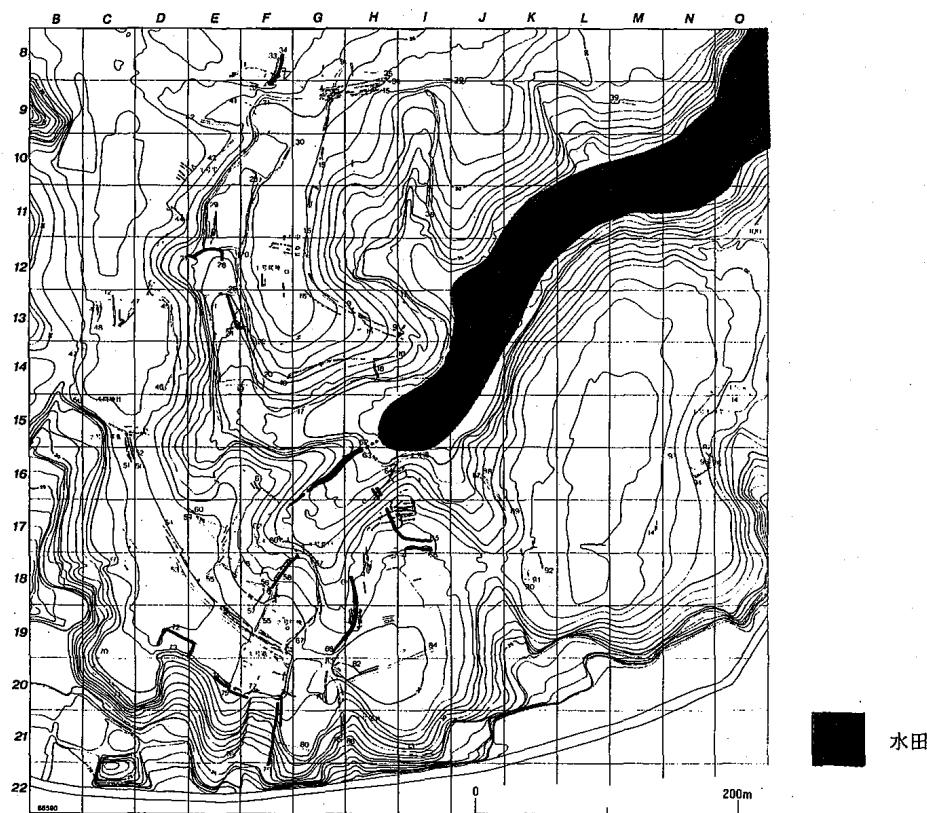
現在の土地区画と一致しないことが多い。宝永スコリアの一次堆積層を含む溝状遺構は、降灰によつて溝が埋没した後、掘りなおして継続使用されているもの、若干位置をずらして掘りなおされたもの、そのまま放棄されたものがあり、その方向は現在の土地区画と一致することが多い。宝永スコリアの二次堆積層を含む溝状遺構には水田への導水路と考えられる溝状遺構が多く、現在の土地区画とほぼ一致する傾向がみられる（岡本・辻一九九三）。

次に溝状遺構の時期別分布を検討すると、覆土に宝永スコリアの一次堆積層を含む近世前期の溝状遺構（第5図上）は、遺跡北側の丘陵を中心に分布している。このうち、谷戸内では最奥部の10～14・E～Fグリッド付近に導水路ないし排水路と考えられる溝状遺構が南北に延びている。丘陵上では8・9列を東西に走る一群およびG列を南北に走る一群があるが、前者については現在も存在する道路とほぼ重なつていて、これに対し南側の丘陵上では稜線に直交ないし斜交する方向で延びているおり、これらは丘陵上の畑の排水路と考えられる。つまり、この時期には遺跡北部の丘陵平坦部および谷戸の最奥部が耕地として利用されていたと推定される。これに対し、

近世前期  
(宝永スコリア)



近世中期以降  
(Ia層)



第5図 慶應SFC遺跡の近世遺構

宝永スコリアの二次堆積層を含む近世中期以降の溝状遺構（第5図下）は、遺跡南部の谷戸を中心に分布している。このうち、谷戸内の16・17・F・Hグリッドに導水路と考えられる溝状遺構が存在し、最近まで使用されたいた水田につながっている。また、谷戸内の調査が不十分であつたため不明確であるが、この谷戸南側の丘陵斜面に存在する一群の溝状遺構は同じ水田に水を引くための導水路であつたと思われる。

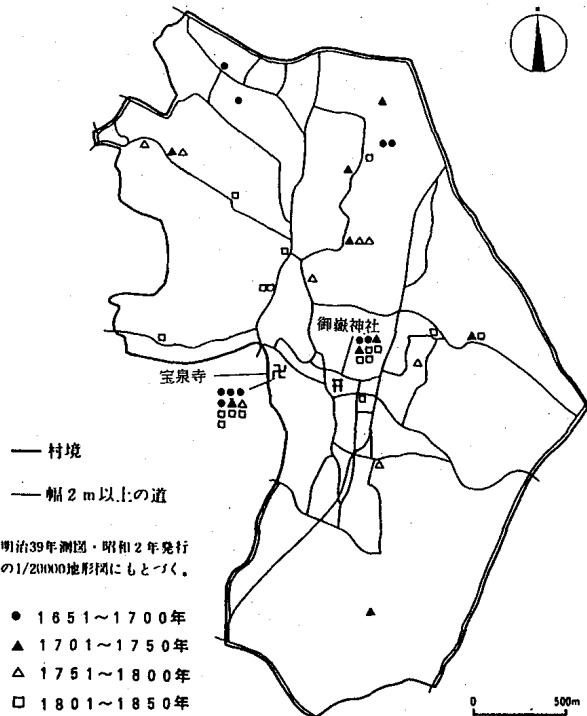
このように、本遺跡では丘陵平坦部については耕地として継続的に利用されていたと推定されるが、谷戸部については時期により利用状況が異なる。近世前期に遺跡中央部の谷戸の最奥部が開発されているが、この地点では水田遺構が検出されなかつたことから畠が営まれていた可能性が高い。ただし、谷戸の下流部に小規模な谷戸水田が存在し、この畠の排水路が導水路の役割も果たしていた可能性もある。また、初期に谷戸の最奥部が耕地として選択されていた理由として、丘陵地に比べ黒色土が厚いことに加え、丘陵部に囲まれた谷戸の最奥部がこの地域特有の強い北風を避けることができたためであると考えられる。近世中期になると丘陵平坦部全体が耕地として開発されるとともに、谷戸部については南部の支

谷が開発され、水田への導水路が掘られ、谷戸水田が営まれるようになつた。なお、第3図にみられるように、明治二三年（一八九〇）の水田の所有者は仲町集落の住民を主体とすることから、彼らがこの水田の開発に積極的に関わっていた可能性がある。

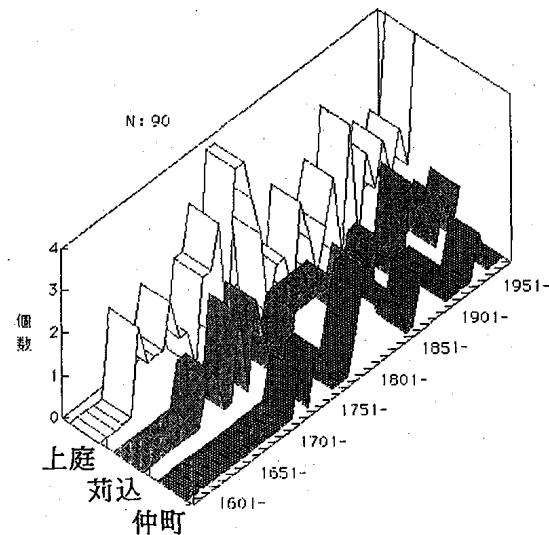
## (2) 遠藤の開発と集落

『皇國地誌』によると、遠藤はかつて遠藤窪村付近が村の中心であり、慶長年間（一五九六—一六一五）に遠藤原村が分割され、宝曆年間（一七五一—一七六四）にさらに北部の遠藤谷村が分割されたとされている。しかし、これらの年代は行政的な村の分割時期を示すものであり、遠藤原村や遠藤谷村にあたる地域にも古くからの集落は存在していたと思われる。この点を考慮しながら、ここでは遠藤の各集落の成立年代について、いくつかの観点から検討してみたい。

まず、道祖神塔、庚申塔、仏像供養塔など集落単位で造立した石塔類の分布について検討する。遠藤では比較的多くの石塔類が残存し、藤沢市による総合調査も行われているが、遠藤の石塔類の分布については山口徹（山口一九九三）が既に検討しており、ここではその成果を用いて分布図を作成した（第7図）。それによると、



第7図 石塔類の造立年代別分布



第6図 墓石の造立年代

造立年代の判明している石塔類は一七世紀後半には久保、松原、琵琶島、 笹久保、一八世紀前半には久保、北原、南原、琵琶島、諸ノ木、山崎、神明谷、一八世紀後半には北原、南原、諸ノ木、山崎、神明谷、一九世紀前半には久保、松原、北原、琵琶島、打越、上庭、仲町、矢崎、谷の各集落に存在する。これらの造立年代と集落分布との関係を検討すると、一七世紀には遠藤窪村（久保集落）・遠藤原村（松原集落）を中心に石塔類が造立され、遠藤谷村では比較的古いと思われる遠藤谷村北部（琵琶島、 笹久保集落）で石塔類が造立されている。一八世紀になると遠藤全域に石塔類が分布するようになるが、慶應SF C 遺跡周辺の遠藤谷村南部（打越、上庭、仲町、矢崎集落）では一九世紀前半の石塔類が多く、他の集落に比べ造立年代が新しいことがわかる。この傾向は近世中期の寛延二年（一七四九）の宝泉寺觀音像銘文に記載されている集落名（荻野他一九八〇）においても認められる（第8図）。銘文に記載されている集落は久保・松原・南原・北原・諸ノ木・琵琶島・ 笹久保・神明谷・打越の九集落である。銘文に記載されている集落が当時の遠藤のすべての集落を網羅しているとは限らないが、これらの集落は近世中期の遠藤の集落の実体をある程度反映して

いると思われ、遠藤窪村、遠藤原村、遠藤谷村北部の集落は多く登場するが、上庭、仲町、苅込、矢崎など遠藤谷村南部の多くの集落はみられないことがわかる。

しかしながら、このことが遠藤谷村南部に古くからの集落が存在しなかつたことを示すとは限らない。一部の集落は比較的早く成立していたものの戸数が少なかつたため、社会組織の運営ができず、独立した集落として認識されずに周辺の集落の一部として認識されていたと思われる。これを慶応SFC遺跡周辺の集落を例として検討すると、遺跡の北東に位置する上庭集落は小出川対岸の諸ノ木集落との関係から「向う諸の木」とも呼ばれており（荻野他一九八〇）、かつては小出川対岸の諸ノ木集落の一部として扱われていたことを窺わせる。実際に上庭集落はこの地区内では比較的古くから存在してい

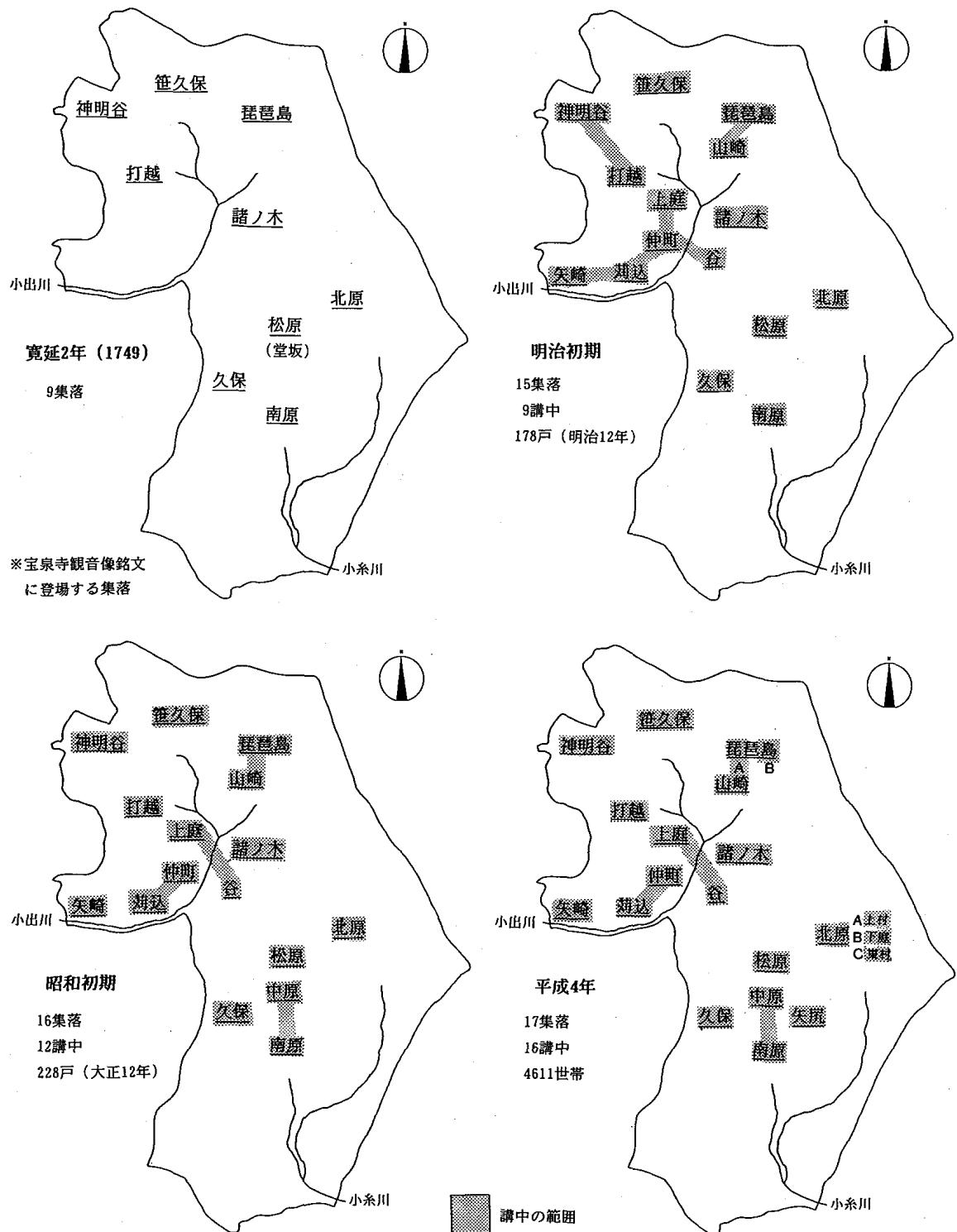
たと思われ、墓石調査から遺跡周辺の集落の墓石の造立年代について検討した結果、集落によつて造立年代に差があり、上庭集落の成立年代が他集落よりも古いことが判明している（第6図）。同様のことが宝暦二年（一七五二）の高野山高室院の檀廻帳（寒川町一九九三）で確認できる。檀廻帳には遠藤村の有力農民として井沢貞右衛門（名主）、井沢徳兵衛（名主）、山田市之丞（名寄）、飯嶋金兵衛（名主）、井沢太郎右衛門（年寄）、桜井五郎左衛門（年寄）、重田金右衛門（年寄）、高井伝左衛門（年寄）、富田磯右衛門（年寄）、富田勘左衛門（年寄）の名があげられている。このうち、井沢（伊沢）姓は北原集落、山田・桜井姓は久保集落、重田姓は諸ノ木集落、高井姓は中原集落、富田姓は琵琶島集落の住民であり、遺跡周辺の集落では上庭集落の飯嶋金兵衛のみが名主として名を連ねている。また、上庭集落の小社である五靈大神が慶応SFC遺跡内にあり、発掘調査の結果、土壌内から一七世紀前半のカワラケと寛永通宝（古寛永）六枚が出土している。以上のことから上庭集落の成立が遺跡周辺の他集落より成立年代が古く、戸数が少なかつたことから対岸の諸ノ木集落の一部として扱われていたことがわかる。

このような集落認識の問題は、近世末～明治初期の段階においても指摘できる。近世末の遠藤の集落については『新編相模國風土記稿』に遠藤全体の戸数は百六十戸、集落（小名）として、西谷（神明谷）、諸木（諸ノ木）、琵琶島、久保、筈久保、打越、苅込、矢崎、北原、松原、南原、矢尻の各集落が記載されているが、山崎、上庭、仲町、谷、中原の各集落が欠落している。次いで明治初

期の遠藤の集落については『皇国地誌』に久保二十一戸、南原二十八戸、松原二十戸、北原三十五戸、諸ノ木十七戸、琵琶島十五戸、笛久保十二戸、神明谷五戸、打越戸、苅込四戸、矢崎八戸と記載されており、やはり山崎、上庭、仲町、谷、中原の各集落が欠落している。ここでこれらの集落が欠落した理由を想像すると、山崎集落はさしておらず、琵琶島集落が十一戸であることから山崎集落は琵琶島集落の一部と認識され記載から漏れたと思われる。上庭、仲町、谷集落は嘉永五年（一八五二）の庚申供養塔の銘文に記載されており、『遠藤村字限図』にもそれぞれ三戸、六戸、二戸の存在が確認できる。上庭集落と仲町集落は両集落が小字では諸ノ木にあたることから諸ノ木集落として扱われていたと推定され、谷集落は成立年代が新しく、二戸のみの集落であったため記載から漏れたと考えられる。また、中原集落については大正～昭和初期に遠藤南部地区の戸数が増加するに伴い、集落として独立したものである。

最後に、遠藤の集落の成立について講中の範囲という観点から検討してみたい。既に述べたように、講中（コウジュウ）は地縁に基づく社会組織で原則として複数の

姓からなる。強い仲間意識で結ばれ、道普請や冠婚葬祭の手伝いなどで相互扶助の役割を果たしている。また、講中は一般的に十二～十六戸程で構成されるとされる。ここでは浅野沙和子（浅野一九九三）の調査結果を基にして講中の範囲の変遷過程をまとめてみた（第8図）。今回は明治初期、昭和初期、平成四年（一九九二）の講中の範囲を図示したが、それによると遠藤全体の講中数は明治初期には九講中であつたものが昭和初期には十二講中<sup>(8)</sup>、平成四年には十六講中と増加している。これを戸数や世帯との関係でみると、明治初期には平均十九・二戸で一講中、昭和初期には十九戸で一講中を組織しており、すべての家が講中に属するとは限らないことも考慮すると十二～十六戸という数値に比較的近い。その後、昭和四〇年以降になると他地域からの転入者の増加などにより戸数が増加するものの、新住民が講中に新たに加入するのは難しいため、この比率の検討は意味をなさないものとなっている。次に、各時期の集落と講中の範囲について検討してみると、遠藤南部地区や東部地区については基本的に一集落一講中であるが、北原集落のように集落が三講中に分割される場合もある。これに対し、遠藤西部地区は明治初期には複数の集落で一講中



第8図 遠藤の時期別集落分布と講中の範囲

を組んでいたものが、徐々に独立していったことがわかる。このことはこの地域ではかつて戸数が少なく一講中を組めなかつたものが、徐々に戸数が増加していったことを意味している。このように、遠藤の中でも地区によつて講中を組んでいた集落の単位が異なり、一般的に戸数の少ない集落同志で一講中を組織していたものが戸数の増加に伴い、集落単位で構中を組織するようになってゆく傾向がみられる。

以上のような石塔類や墓石の年代など様々な検討結果から各集落の成立年代<sup>(9)</sup>を推定すると次のようになる。なお、年代はおおよそ①が中世後期、②が中世末～近世初期、③が近世前期～中期、④が近世後期、⑤が大正～昭和初期である。

- ①久保集落、松原集落、琵琶島集落
- ②北原集落、南原集落、諸ノ木集落、笛久保集落、神明谷集落、上庭集落
- ③打越集落、仲町集落、苅込集落、矢崎集落、山崎集落
- ④谷集落
- ⑤中原集落

これらの遠藤の開発過程は基本的に『皇国地誌』に記

載されている遠藤窪村→遠藤原村→遠藤谷村という開発の順序とほぼ一致する。また、ここで注目されるのは、「窪」「原」「谷」という村名に表現されているように、集落の立地をみると基本的に①が相模野台地と高座丘陵にまたがつた窪地状の地形、②が相模野台地上あるいは高座丘陵の中でも比較的平坦な地形、③④が高座丘陵上の起伏のある谷戸地形にそれぞれ立地していることである。これらの立地傾向には中世から近世にかけての集落選地における嗜好性が反映されており、周辺地域との比較を含め今後検討されるべき課題である。

### (3) 遠藤の開発と慶應SFC遺跡

以上のような遠藤の開発過程の中で、慶應SFC遺跡はどのように位置づけられるであろうか。まず、検出された遺構群の年代から中世末には遺跡内には未開発地が多かつたが、宝泉寺と宇都母知神社を結ぶ道路が丘陵稜線に沿つて存在し、遺物の分布状況から道路の周囲を中心に戸地として利用されていてと推定される。また、発掘調査の対象とはならなかつたが遺跡東部の160グリッド付近に区画溝で囲まれた地点があり、内側の未発掘部分にこの時期の屋敷が存在したと思われる。この地点が「元屋敷」と呼ばれていることからこれが仙波氏の館で

あつた可能性がある。その後、遺跡内の未開発地は徐々に開発され、それに伴い遺跡中央部の区画溝が遠藤と打戻の村境として認識されたと考えられる。近世前期になると、丘陵平坦部の他に遺跡中央部の谷戸最奥部が畠として利用されたと推定される。また、この時期に小規模の谷戸水田が存在した可能性もあるが、発掘調査では検出されなかつた。近世中期になると遺跡全体が耕地として開発され、谷戸部についても、導水路と思われる溝状遺構の存在から遺跡の中央部の谷戸に水田が開かれたことがわかる。

このように、検出された遺構の分布や年代からみると、本遺跡の存在する地域は中世から一部開発はされていたものの、本格的に開発されるのは近世前期から中期にかけてであると推定される。これを周辺の集落の成立時期と比較してみると、上庭集落以外の集落の成立は近世前期～中期頃と考えられることから、近世前期には遺跡周辺に若干の屋敷地は存在したもの現在に至る集落景観が整えられたのは近世中期であり、このころ谷戸内に水田が開かれたと思われる。また、遠藤の石高の変遷をみると享保二〇年（一七三五）から文政一〇年（一八二七）にかけて石高が百五十石程増えているが（岡本・辻

一九九三）、その増加分にこのような谷戸水田が含まれる可能性がある。その後、遺跡周辺の各集落の戸数は若干増加したと思われるが、明治一四年（一八八一）の『遠藤村字限図』によると、明治初期の集落の戸数は神明谷集落が七戸、打越集落が五戸、上庭集落が三戸、仲町集落が六戸、苅込集落が四戸、矢崎集落が八戸で全体では三十三戸にすぎない。講中の範囲（第8図）をみてもこの時期には神明谷集落と打越集落で一講中、上庭・仲町・苅込・矢崎集落で一講中を組織していたことがわかる。次いで昭和三年（一九二八）の『小出村地番入地図』によると戸数は神明谷集落が十一戸、打越集落が六戸、上庭集落が三戸、仲町集落が八戸、苅込集落が五戸、矢崎集落が十戸で全体では四十三戸に増加している。講中数も増加し、神明谷集落、打越集落、矢崎集落が単独で一講中を組織し、上庭集落は谷集落、仲町集落は苅込集落と一講中を組織している。

このように、発掘調査の成果を中心に慶応SFC遺跡およびその周辺地域の歴史的変遷を追つてみると、遠藤全体の中でも遺跡周辺地域は開発が比較的遅れた地域であることがわかる。その理由として大山街道や厚木街道などの主要街道が付近を通つていなかったため、交通の便が

悪いことがあげられる。また、現在でもこの地域は市街化調整区域である。しかし、逆に未開発の広大な土地が残されたため大学用地として注目され、慶應義塾大学の新キャンパスが開校することになったわけである。開校

に際してはバス路線や下水道が整備され、現在ではむしろ遠藤の中心というイメージも定着しつつある。

#### IV おわりに

本稿では、慶應SFC遺跡の中近世の発掘調査成果を中心とし、遺跡周辺地域の開発過程など地域史との関連からいくつかの考察を行った。慶應SFC遺跡の所在する藤沢市遠藤地区のように、文献史料に乏しい地域で過去の様子を知るために、地域に残る伝承などの聞き取り調査や墓石、石塔類の調査を行うことも必要であるが、今後は発掘調査から得られる情報も積極的に利用するべきである。また、中近世村落の空間構成や景観の研究においても遺跡の発掘調査の成果は今後重要な役割を果たすと思われる。そのためには発掘調査を行なう側も周辺遺跡に関する情報だけでなく、遺跡周辺地域に関する情報

をできる限り収集した上で発掘調査を実施するべきである。いざれにしろ、地域に密着し、地域に貢献する成果

をあげるためには、従来の考古学的調査だけでなく、関連分野の研究者と連携し、考古学の枠にとらわれない総合調査を行い、よりよい地域研究をめざす必要がある。

本稿は平成六年の日本考古学協会における口頭発表「近世農村考古学と地域研究—神奈川県藤沢市遠藤地区の事例から—」を基にして、その後の調査成果を追加してまとめたものである。本稿作成にあたり、遠藤地区において共同調査を行った山口 徹・朽木 量・浅野沙和子・瀧上清隆・中村弘昌・佃和雅子の諸氏をはじめ、鈴木公雄・岡本孝之・加藤信夫・辻 真人・中島 登・望月 芳の諸氏ならびに遠藤地区の方々に御指導・御協力頂きました。記して感謝いたします。

#### 註

- (1) 藤沢市遠藤地区の行政区分の変遷は複雑である。は近世には高座郡遠藤村にあたるが明和四年（一七六七）に三給支配が成立し、遠藤窪村、遠藤原村、遠藤谷村に区分された。明治三年（一八七〇）に合併して高座郡遠藤村となり、明治二二年（一八八九）に高座郡小出村遠藤地区、昭和三〇年（一九五〇）には藤沢市に編入されて藤沢市遠藤地区として現在に至っている。なお、近世以降、遠藤村（地区）の範囲は基本的に変わっていない。

(2) 遠藤の自治会は北部地区（琵琶島・山崎・諸ノ木・笹久保集落）、南部地区（谷・久保・中原・南原・矢尻集落）、西部地区（神明谷・打越・上庭・仲町・苅込・矢崎集落）、東部地区（松原・北原集落）に分けられている。

本稿における地区名称はこの区分に従うこととする。

(3) 長田文弘氏所蔵

(4) 区画溝については東京・神奈川の事例を検討した渋江芳浩の論考（渋江一九九二）がある。それによると、区画溝の断面形態は逆台形やV字形を呈しており本遺跡の事例と共通している。立地については丘陵尾根に沿いながら沖積地を囲むかたちで構築されており、本遺跡でも第14号溝がこれにあたり、第9・10・11号溝もセットで捉えるとこれに該当する。しかし、区画溝の年代については一二世紀～一五世紀の年代が与えられているのに対し、本遺跡の事例は一六世紀～一七世紀初頭に位置づけられる。

(5) 渡来銭は北宋銭（元豊通宝、政和通宝、治平元宝、熙寧元宝、紹聖元宝）を主体とし、他に南宋銭（皇宋通宝、淳熙元宝）、明銭（永樂通宝）、唐銭（開元通宝）が出土している。

(6) 近世以降の溝状遺構の機能については、イモ穴を除くと流水溝（導水路や排水路）と区画溝に分けられるが、これらを厳密に区分することは難しい。また、継続年代も用途や使用状況によりかなり異なると思われる。

(7) 宝泉寺観音像銘文には堂坂と記載されているが、松原集落の中では成立が古いと考えられる地区が御嶽神社の近

くで坂の下に位置することから、堂坂とされる集落が現在の松原集落の一部にあたると思われる。

(8) このうち、笹久保集落については関東大震災によりほとんどの家が全壊したため、東側の高台に移動している。移動後も集落名は笹久保のままである。

(9) 既に述べたように、一般に二～三軒の家が一定の土地を占有すれば集落として認識されるが、軒数が少ないため社会組織の運営ができず、他集落に組み込まれてしまふ場合もある。ここでは軒数に関らず一定の土地に居住を開始した年代を集落の成立年代とする。

#### 参考文献

- 浅野沙和子 一九九三「遠藤の社会組織」『湘南藤沢キャンパス内遺跡第一巻（総論）』慶應義塾  
宇津木台地区遺跡調査会 一九八八b『宇津木台遺跡群XII』  
岡 重文 他 一九七九『藤沢地域の地質』地質調査所  
岡本孝之・辻 真人 一九九三「溝と土地区画」『湘南藤沢キヤンバス内遺跡 第一巻（総論）』慶應義塾
- 荻野好子 他 一九八〇『遠藤の昔の生活』藤沢市教育文化研究所  
木村 碇 一九八八『村落景観の史的研究』八木書店  
慶應義塾 一九八八『慶應義塾大学藤沢キャンパス建設計画環境影響予測評価書』

繩文時代第Ⅱ部』

報告書』第十一集

慶應義塾 一九九二-b 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2卷

岩宿時代・繩文時代第Ⅰ部』

慶應義塾 一九九三-a 『湘南藤沢キャンバス内遺跡 第4卷

弥生時代・近世』

慶應義塾 一九九三-b 『湘南藤沢キャンバス内遺跡 第1卷

総論』

桜井準也・朽木量・浅野沙和子 一九九四「近世農村考古学

と地域研究―神奈川県藤沢市遠藤地区の

事例から―』『日本考古学協会第六〇回

総会研究発表要旨』日本考古学協会

寒川町 一九九三「相模国姓氏名一覧」『寒川町史調査報告書

一一高野山高室院資料(二)』

渋江芳浩 一九九二「中世区画溝に関する覚書」『東京考古』

一〇号

水篠 真 一九八九「村や町を囲うこと」『国立歴史民俗博物

館研究報告』第一九集

大日本地番入地図刊行会 一九二八『小出村地番入地図』

竹内理三編 一九八四『日本地名大辞典』一四神奈川県』角

川書店

日本地名研究所編 一九八七『藤沢の地名』藤沢市

服部清道 一九五九「遠藤概観」「わが住む里」第一二号

服部清道 一九六八『藤沢市域の道祖神塔』

服部清道 一九七三『藤沢市域の庚申供養塔』『藤沢市文化財

調査報告書』第八集

服部清道 一九七六『庚申供養塔調査録』『藤沢市文化財調査

雄山閣 一九八〇『新編相模國風土記稿卷之六十一 村里部

農村部の考古学的調査と地域史―藤沢市慶應義塾湘南藤沢キャンバス内遺跡の事例から―

七九(五五五)

服部清道 一九九三「玄光院跡の調査記」『湘南藤沢キャンバ

ス内遺跡 第一巻(総論)』慶應義塾

藤沢市教育委員会 一九八八『藤沢市文化財総合調査報告書

第三集中部地区(南)』

藤沢市史編集委員会 一九八〇『藤沢市史 第七巻(文化遺産

編、民俗編)』藤沢市役所

藤沢市都市計画課 一九八七『藤沢市都市計画三〇年のあゆ

み』

藤沢市文書館 一九八六『藤沢市史料集(十二) 村明細帳、

皇國地誌』

藤沢市文書館 一九九一『図説ふじさわの歴史』

松川 潤 一九九二「大庭・遠藤地域」『地図に刻まれた歴史

と景観―明治・大正・昭和 藤沢市』

丸山久子他 一九六一『遠藤民俗聞書』藤沢市教育委員会

山口金次 一九七三「玉雄山宝泉寺と仙波、戸田、伊丹氏に

ついて」『郷土茅ヶ崎下巻』茅ヶ崎市教育委員会

山口 徹 一九九二「ムラの組織と空間構成―神奈川県藤沢

市遠藤地区の場合―」『民族考古』一号、

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

山口 徹 一九九三「藤沢市遠藤における藩政村と集落につ

いて」『湘南藤沢キャンバス内遺跡第一

卷(総論)』慶應義塾

湯山 學 高座郡卷之三』

一九七〇「藤沢地域における後北条氏の家臣たち  
—中世における藤沢市地域の領主層の考  
察（続編）—」『わか住む里』第二二号